研究ノート

ジョゼフ・ロージー監督のオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地調査

荻　野　静　男

序）

2016年３月21日～３月25日にかけて主としてヴェネチアとその周辺のヴェネト州において、ロージー監督（1909-1984）の《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地調査を行った。特にこの映画に登場するパッラーディオ建築の視察が、ガイドを雇っての本視察旅行の大きな目的であった。このオペラがヴェネト地方を背景に撮られている理由は何なのか？この問いに対する回答を探る調査である。オペラ《ドン・ジョヴァンニ》がこうした背景とともに演じられることは、従来の映画やステージ上演を考慮しても、ロージーのこの映画のみにおいてであると思われるからであった。

またこの調査旅行以来、筆者はヴェネチアとヴェネト地方およびその輩出した人物について真剣に考え始めるとともに、その地域とオーストリアとの関係についても考察を巡らせるようになった。やはり北イタリア現地の空気や光、風景、そこでの見聞を契機として、以前とは違った思索のスイッチが入ったように思う。そしてこのオペラ映画に関しても、これまでとは異なる見解を抱くようになったのである。ヴェネチアの街と海、そしてヴェネトの光と影のなかの《ドン・ジョヴァンニ》。この研究ノートは、そうした環境のなかに置いたこのオペラに関する思索のささやかな結実である。

Ⅰ） ジョゼフ・ロージーの《ドン・ジョヴァンニ》

ロージーのオペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》は1979年に劇場公開された映画で、現在では個人的にDVDやBlu-rayでも視聴できるようになっている。1970年代はヨーロッパにおいてオペラ映画がさかんに制作された時期で、《ドン・ジョヴァンニ》以外にもモーツァルトの《魔笛》（イングマール・ベルイマン監督）や《フィガロの結婚》（ジャン＝ピエール・ポネル監督）など多数のオペラ映画が作られている。

アンドレア・パッラーディオ（1508-1580）はイタリアのヴェネト地方・パドヴァ出身の建築家である。彼はヴェネチアならびにヴェネトに存在する教会や多数の貴族のヴィラを設計しており、現在ではその建築様式はパッラーディオ様式と呼ばれ、近代のイギリス建築やアメリカの大統領公邸ホワイト・ハウスの建築にも影響を与えているといわれる。ロージーの《ドン・ジョヴァンニ》はラ・ロトンダやヴィラ・エーモなどのヴェネト地方のヴィラ内部や付属の庭園をロケ地として撮影されている。また、その撮影と同時に野外や建物内部にオーケストラを配置して演奏させ、歌手による歌唱とともに伴奏も録音された。オペラ映画のなかにはスタジオで撮影されたり、映像は野外ロケによるが、歌手はいわゆる口パクにとどめ、実際はスタジオで歌唱とオーケストラ伴奏が録音されるものもあるが、ロージーの《ドン・ジョヴァンニ》はそれとは異なる。

この《ドン・ジョヴァンニ》の制作国はフランス、イタリア、ドイツの３ヵ国となっている。上映時間は176分でカラー、ドルビーである。また指揮者としてロリン・マゼール（1930-2014）が起用された。この映画は元来パリ・オペラ座芸術監督（当時）のロルフ・リーバーマン（1910-1999）を中心に構想・企画されたものである。リーバーマンはパリ・オペラ座に起用される以前はドイツのハンブルク歌劇場の芸術監督であり、その時期にもリーバーマン・プロダクションという制作会社で《魔弾の射手》や《ヴォツェック》などの映画を作った経験がある。

制作の実務を取り仕切ったのはダニエル・トスカン・デュ・プランティエ（1941-2003）という、これ以外にも多数のフランス映画やオペラ映画の製作に携わった人物であった。彼は通常トスカンと呼ばれ、フランスの映画会社ゴーモン社の重役であり、プロデューサーでもあった。《ドン・ジョヴァンニ》の他にも《パルジファル》や《トスカ》それに《マダム・バタフライ》などの優れたオペラ映画を制作した。

ジョゼフ・ロージーはこの映画撮影以前には、オペラというジャンルにまったく携わった経験のない監督である。しかしリーバーマンはこのような人物をあえて《ドン・ジョヴァンニ》の監督に起用した。その理由は、リーバーマンがまったく新しいコンセプトのオペラを作ろうという考えを抱いていたからである。つまり1970年代以前にヨーロッパのオペラハウスのステージやオペラ映画において慣習的だったオペラ―主に音楽的、聴覚的側面のみに重点を置く上流階級のためのオペラ―とは異なり、このオペラ映画は大衆にもわかりやすい視覚的側面にも力点を置くものなのである。

配役には当時一世を風靡していた歌手たちが起用されている。《ドン・ジョヴァンニ》のプラハ初演時の役順でその錚々たる面々をあげると、次のようになる。

ドン・ジョヴァンニ	…	ルッジェーロ・ライモンディ　Br
騎士長	…	ジョン・マカーディ　B
ドンナ・アンナ	…	エッダ・モーザー　S
ドンナ・エルヴィーラ	…	キリ・テ・カナワ　S
ドン・オッタ―ヴィオ	…	ケネス・リーゲル　T
レポレッロ	…	ジョゼ・ヴァン・ダム　Br
ゼルリーナ	…	テレサ・ベルガンサ　MS
マゼット	…	マルコム・キング　Br
黒衣の従者	…	エリック・アジャーニ　（演技）

2016年３月の本映画のロケ地調査では、上述のように撮影の舞台となったヴェネト地方のパッラーディオ建築―ヴェネチア貴族のヴィラおよびテアトロ・オリンピコ、ヴェネチアの教会など―を視察してきた。すなわちロージーは以下の建築物の内部ならびに外部の庭園においてメガホンを取っているのである。〔　　〕内は補足説明、（　　）内は本映画における使用目的、年号は建築物の完成年を示す。

1．ヴィラ・アルメリコ・カプラ〔通称ラ・ロトンダでヴィチェンツァ近郊にある〕
Villa Almerico Capra〔La Rotonda〕1566-67
（ドン・ジョヴァンニの家）

2．テアトロ・オリンピコ〔ヴィチェンツァ市内の恒久的劇場で、多数の映画でロケ地として使用される〕
Il Teatro Olimpico 1580
（冒頭におけるシーン）

3．バシリカ・パッラディアーナ〔ヴィチェンツァ市内の建物〕
Basilica Palladiana 1546-49
（騎士長の殺害場所）

4．ロッジア・デル・カピタニアート〔Piazza dei Signori に面し、バシリカの向かい側に位置する〕
Loggia del Capitaniato 1571
（騎士長殺害の場面）

5．ヴィラ・カルドーニョ〔ヴィチェンツァ近郊　ジョヴァンニ・アントニオ・フリゾーリのフレスコ画が壁面にある〕
Villa Caldogno 1545頃
（ドンナ・アンナの家）

6．ヴィラ・エーモ〔ヴィチェンツァ近郊〕

Villa Emo 1564頃
（ドンナ・エルヴィーラの家）

7．ヴィラ・ポイアーナ〔ヴィチェンツァ近郊〕
Villa Poiana 1549頃
（映画での使用については定かではないが、半地下のような場所が宴会準備の台所として使用されている可能性が残る）

8．バシリカ・サン・ジョルジョ・マッジョーレ〔ヴェネチアの教会〕
Basilica San Giorgio Maggiore 1566-1575
（ドン・ジョヴァンニとレポレッロが墓地に行くシーンでこの教会前の広場が使用されている）

＃ムラーノ島のガラス工房前の船着き場（これはパッラーディオ建築ではないが、場所は特定できる）

以上がロケ地調査で訪れたパッラーディオ建築群である。もちろんヴェネト州には上記以外にもパッラーディオによるヴェネチア貴族のヴィラが残存している。ただし子孫がいないためや、膨大な維持費がかかるせいか、放棄されて荒廃したヴィラが多いようである。これはパドヴァ・ヴェネチア間のブレンタ川両岸に存在する邸宅群の様子を見ればよくわかる。

Ⅱ）オペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》におけるパッラーディオ建築の歴史的意味について

ヴェネチア貴族たちはみずからの権勢を誇示するために、ヴェネチア近郊に壮麗な邸宅を建設するのが常であった。そしてヴィラの設計をパッラーディオに依頼するのも、その権勢誇示の一環であった。

もともと16世紀というのはイタリアのルネサンス期にあたり、古典古代の芸術や文化の復興が行われた時期である。建築や絵画の分野でも古代ギリシア・ローマ期の様式が採り上げられた。よってパッラーディオの設計によるヴィラ

にも古代ギリシア風の円柱を有するファサードがある。ただし本物の円柱ではなく、経費削減のためか、単なる円柱の絵である場合もある。実際ラ・ロトンダやヴィラ・エーモなどを観察するとそれがよくわかる。また両翼に農作業用の建物などを配していることが、古代建築との大きな相違点である。

そして建物内部には必ず壁画が描かれるか、あるいは壁に大きな絵画が掲げられているが、その大部分を占めるのは裸体画である。やはりルネサンスという古代文化復興の時期ゆえということもあるが、ヴェネチア共和国がローマの宗教的権威からある程度自由であったことにもよるのではないか。まさにヴェネトのヴィラ群はヴェネチア共和国を担った貴族たちの世俗的権力の発現と考えられよう。ちなみにオペラという芸術自体も、16世紀末に北イタリアのフィレンツェに生まれた。

16世紀ヴェネチア貴族のヴィラ（邸宅）は上述の説明からもわかるように、ヴェネチア周辺やヴェネト地方の随所に現在も建っている。本調査旅行においてヴィチェンツァやパドヴァの郊外を車で周回することができたが、そのことは一目瞭然であった。ではロージーあるいはこのオペラ映画の制作者たちはこうした邸宅群をなぜオペラ《ドン・ジョヴァンニ》のロケ地として選択したのか。

このオペラの舞台は元来スペインのセヴィリアとして設定されている。もともとドン・ジョヴァンニはスペイン貴族で、オペラはこの愛の冒険者の放蕩な生活を描くものなのである。したがって舞台をイタリアのヴェネト地方に移したことに、本映画の制作者独自の意図を読み取る必要がある。

やはり作曲者モーツァルトの相方のリブレティスト、ロレンツォ・ダ・ポンテの形姿を、この映画のロケ地選択の理由としてあげなければならない。周知のようにダ・ポンテはヴェネト地方チェネダ生まれのユダヤ人である。そして彼の友人であったヴェネチア生まれのジャコモ・カサノヴァも視野に入れておく必要がある。この両者をオペラ《ドン・ジョヴァンニ》の背景に置き、主人公をセヴィリア貴族ではなくヴェネチア貴族と見立てて、オペラ映画を撮った

と考えることができる。こうした推論をたてるならば、ヴェネトの貴族の邸宅がロケ地として使用されていることにも、納得がいく。

とするならば、本映画の主人公ドン・ジョヴァンニにカサノヴァの姿が投影されていることになる。カサノヴァはダ・ポンテの台本執筆に協力し、1787年のプラハにおける本作の初演を観劇していたと伝えられている。またダ・ポンテはヨーゼフ２世亡き後ロンドンに移り、それからさらにアメリカのニューヨークへ渡った。アメリカにおける《ドン・ジョヴァンニ》初演の際には、80歳という高齢をおして臨席している。

Ⅲ）ヴェネチア、ヴェネトとオーストリアとの関係

現在ヴェネト州はオーストリアのケルンテン州ならびにチロル州に隣接している。この地方の人々の眼は昔から南のローマの方向ではなく、北東のオーストリアやスロヴェニア方面、それにアドリア海対岸のクロアチア方面に向いていた。実際ロケ地調査の際に現地の高速道路を走行していても、すれ違う多数のトラックや乗用車のナンバープレートからは、それがオーストリアやスロヴェニア方面から来ていることが読み取れた。また観光客の多くが標準ドイツ語とは異なるオーストリア訛りのドイツ語を話していることから、彼らがオーストリア（あるいは旧ハプスブルク帝国の版図内）からこの地方を訪れていることが判明する。また私が現地で雇ったガイドは毎年夏と冬に旧オーストリア帝国の版図内の山間部に避暑とスキー休暇にゆくとのことであった。さらにスプリッツ（Spritz）というオーストリア的発想の飲み物もヴェネト州にはある。このように現在でもこのヴェネチアとヴェネト地方がその北東の地域、つまりオーストリアやスロヴェニアならびにアドリア海対岸と密接な交流を有していることが観察される。

ヴェネチア共和国は697年の建国から1797年にナポレオン・ボナパルトに屈服するまで1000年以上続いている。翌1798年にヴェネチア共和国地域はオーストリア領となり、1805～1814年にふたたびフランス領となる。ナポレオン体制

崩壊後の1815年よりその地域はまたしてもオーストリアに帰属し、その後1848～1849年のサン・マルコ共和国時代を除き、1866年にイタリア王国に帰属するまでハプスブルク帝国に属していた。こうした歴史からも、ヴェネチア共和国地域がオーストリアと密接な関係を有してきたことが認識される。ローマを首都とするイタリアに属するようになってから、まだ150年程度しか経過していないのである。したがってその地域がイタリア中南部の諸都市とよりはむしろ、グラーツやヴィーンなどのオーストリアの都市と昔から文化的にもより緊密な交流を有していたことは、十分理解可能である。ダ・ポンテやカサノヴァなどの知識人もまた、南よりは北東へと進路を取ったのである。

オペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》の構想者であるロルフ・リーバーマンやトスカン、ジョゼフ・ロージーとその周辺は、こうした歴史的経緯を熟知していたものと推測される。ドン・ジョヴァンニにカサノヴァの形姿をオーバーラップさせて彼らは本映画の製作に踏みだし、パッラーディオの手になるヴィラや教会、劇場においてロケを敢行した。ヴェネチアとヴェネトの香りあふれる映画は、このようにして制作されていった。

Ⅳ）オペラ映画《ドン・ジョヴァンニ》の意図

この映画のプロローグにモットーとして引用されているのは、イタリアの思想家アントニオ・グラムシ（1891-1937）の次の言葉である：

「旧きものが死につつあり、
新しきものは生まれない
この暫定的時期には
多数の病的兆候が表れる」

この言葉は本来グラムシの生きていた20世紀前半の時代を表すものであるが、ロージーはこれを《ドン・ジョヴァンニ》の成立した1787年頃の時代に適

用している。すなわち《ドン・ジョヴァンニ》が作曲されたフランス革命前は、グラムシの上述の言葉に表現されているような「旧きものが死につつ」あるが、「新しきものは」まだ「生まれない」時期なのである。そのような時代には「病的兆候」、つまりこのオペラの主人公のごとき退廃的行状が顕われるとロージーは考えている。

このオペラ映画全体の通奏低音となるのは、映画の初めに聴こえる水の都ヴェネチアに押し寄せる波の音である。そうした波に洗われる不安定な都がヴェネチアであり、またドン・ジョヴァンニの時代全体でもある。そこにはこの波の音とともに鳥の鳴き声も聴こえてくるが、それは両者あいまって映画鑑賞者に荒涼とした印象を与えずにはいない。鑑賞者は視覚面と聴覚面との両面において荒涼とした雰囲気による打撃をこうむるのである。

カサノヴァの時代はヴェネチア共和国の終焉の時期と重なる。それはヴェネチアの爛熟した退廃的文化の落日を示すが、このことが映画の冒頭において上記のごとき感覚的手段により映画視聴者に暗示されている。

さらにヴェネチアの落日は同時にまた、この映画制作の時期にも重ね合わされている。ロージーはブレヒトの薫陶も受けた社会派の監督で、それがために第二次大戦後ハリウッドでレッド・パージを受け、その地における活動が困難になった。それゆえロージーはヨーロッパに移らざるをえなかった。その彼が1970年代後半にメガホンを取ったのが、このオペラ映画である。彼はその時期をグラムシの言葉に表れているいわゆる暫定的な移行期として把握している。つまり彼は1970年代前半までのオペラ文化を「死につつ」あるものとみなしたがゆえに、映画冒頭にパリ・オペラ座炎上のシーンを置いたのではないだろうか。またその炎上は時代全体のそれとしても把握されているのではなかろうか。

オペラハウスに集う上流階級とこの階級のための「旧き」オペラ文化。その終焉をオペラ座の炎上は示している。では新しいオペラ文化とは何なのか。それはオペラ座のような豪華な歌劇場がなくとも楽しめるオペラ・ムービーである。庶民が羽織や袴を身に着けなくとも、平服で気軽に楽しめるオペラ映画、

それこそが新しいオペラなのである。オペラに対して既存の思い込みやとらわれを持たないいわば素人の演出家ロージー。彼の手によってまったく新しいコンセプトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》が制作された。これはもはや少数の上流市民のみが享受する類のオペラではなく、大衆が安価に楽しめるものである。

ロージーやリーバーマンがとったのはオペラの大衆化路線である。そこにはおそらく上層階級に属する少数者のみを当てにしていては、オペラ文化の将来はないのではないかという危機感があったものと推測される。映画という当時主流を占めていたメディアを通じて、オペラ芸術の延命が図られたのではなかろうか。また社会的平等の意識ゆえに、多数を占める大衆にもっとオペラを享受してもらいたいという意図もあったものと思われる。

参考文献

ジェームズ・S. アッカーマン『パッラーディオの建築』中森義宗訳、彰国社　1979年
福田晴虔『パッラーディオ：世界の建築家』鹿島出版会　1979年
ヴィトルト・リプチンスキ『完璧な家：パラーディオのヴィラをめぐる旅』渡辺真弓訳、白水社　2005年
渡辺真弓『ルネッサンスの黄昏：パラーディオ紀行』丸善　1988年
渡辺真弓『パラーディオの時代のヴェネツィア』中央公論美術出版　2010年
渡辺真弓『イタリア建築紀行：ゲーテと旅する７つの都市』平凡社　2015年
Caroline Constant『パッラーディオ：建築ガイドブック』福田晴虔訳、丸善　2008年

なお本研究ノートの成立は科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）の助成による。記して謝意を表する。また調査中にヴィラを多数写真撮影したが、本研究ノートでは写真を割愛せざるをえなかった。これはいずれまた別の機会に発表したい。